

## 陳旧期川崎病剖検例の肺動脈病変

—特に小児期における弾性型肺動脈における生理的変化との比較検討—  
(分担研究：川崎病心血管後遺症の追跡，管理に関する研究)

渋谷和俊<sup>1)</sup>、若山 恵<sup>1)</sup>、直江史郎<sup>1)</sup>、増田弘毅<sup>2)</sup>、田中 昇<sup>3)</sup>

**要約** 62例の川崎病剖検例の中から陳旧期に相当する11例の肺動脈病変について病理組織学的に検討した。この内3例の弾性型肺動脈に線維性内膜肥厚，内弾性板断裂をみ，川崎病の瘢痕として矛盾しない所見と判断した。本症における肺動脈病変は，冠状動脈病変に比べ軽微なものが多く，大半の症例で瘢痕を残さず治癒するものと考えられた。また，瘢痕を残した症例でも肺動脈圧の上昇は，形態的には認められなかった。

**見出し語：** 川崎病，肺動脈，動脈炎

**目的** 近年，川崎病の急性期死亡例の減少に伴い，陳旧期における病理学的変化が，注目されている。中でも急性期に血栓性閉塞性動脈瘤を形成する冠状動脈では，川崎病発症後数年を経た剖検例でも，内膜肥厚中膜非薄化を伴う血管径の拡張を残す事実が指摘されている<sup>1)</sup>。我々は，川崎62例の剖検肺を用い，陳旧期死亡例における肺動脈の変化を中心とした病理組織学的検索を行い，冠状動脈のごとき後遺病変の有無について検討した。また，川崎病にみられる肺動脈病変が，肺高血圧症を招来しうる可能性についても若干の考察を試みた。

**材料及び方法** 自験例に加え全国諸機関のご好意により収集し得た川崎病剖検例62例の肺，並びに対照としてVSD手術後17年後に肺高血圧で死亡した23歳女性の剖検肺を用いた。これらは，

10%ホルマリンにて固定後，可能な限り肺門部を含む切片とし，型の如く標本を作成。光顕的観察を行った。

**成績** 肺動脈病変は，62例中27例に認められた。これらは，第30病日前後を極期とし，中膜の水腫性粗開性変性を主とした増殖性汎肺動脈炎ともいべき変化で，弾性型肺動脈のみに出現する。第30病日以後第90病日までは，内膜の細胞線維性肥厚を残す症例もあるが，これ以後に死亡した11例中3例に弾性型肺動脈の線維性内膜肥厚を認め，後遺病変としては矛盾しない変化であった(図1)。これは，肺高血圧症例(H&E VI)の弾性型肺動脈内膜肥厚部が，泡沫細胞を混ざる細胞線維性肥厚であることとの大きな相違点であった。

1) 東邦大学大橋病院病理学研究室 (Dept. of Pathology Toho Univ. Ohashi Hospital)

2) 秋田大学医学部第二病理学教室 (2nd Dept. of Pathology, Akita Univ. School of Medicine)

3) BML病理部 (Dept. of Pathology, Biomedical Laboratory)

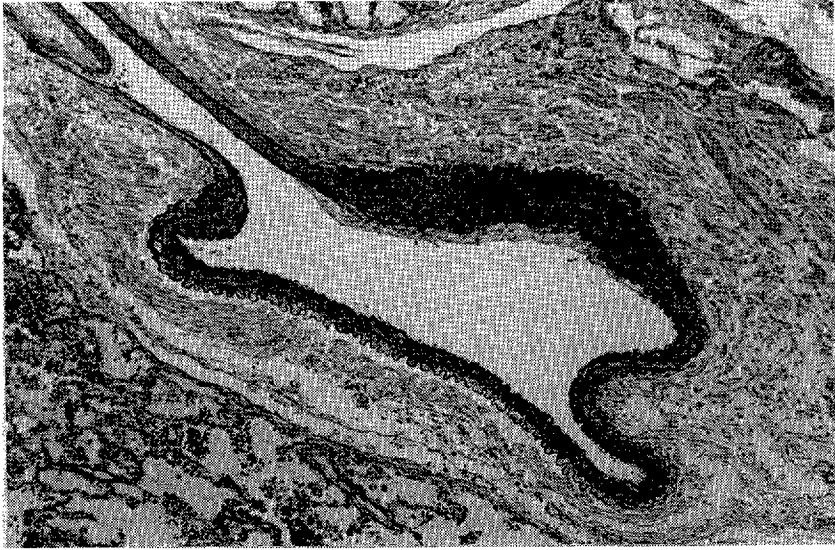


図 1 川崎病罹患後11年8カ月死亡例  
(Klasterica H&E stain, x100)

Chronological Changes of Pulmonary Arteries  
in  
KAWASAKI Disease

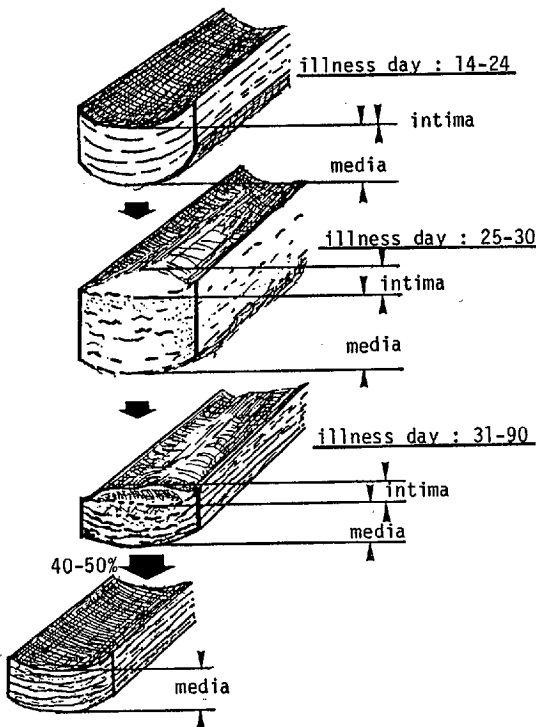


図 2

結論 今回検索を行った全ての症例で、急性期肺動脈病変と同様に<sup>2)</sup>筋型肺動脈の中膜に著変なく、また第90病日以後の症例の弾性型肺動脈の変化も軽微なものがほとんどであった。このことから、川崎病における肺動脈病変は、多くの例で癒痕を残さずに消退し(図2)、仮に僅かな線維性内膜肥厚を残した症例についても、肺高血圧症へは至らないと推定された。

文 献

- 1) 高橋啓, 渋谷宏行, 跡部俊彦, 直江史郎, 田中昇, 増田弘毅: 他の原因にて死亡した川崎病罹患既往児の病理組織学的検討, *Prog. Med.* 7:21-25, 1987
- 2) 渋谷和俊, 跡部俊彦, 増田弘毅, 田中昇, : 川崎病における肺血管病変の病理組織学的検討, *脈管学*, 27:293-304, 1987

Abstract

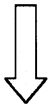
Histopathology of Pulmonary Arteries observed in the Absolute Stage of  
Kawasaki Disease

—comparative study between the involved and normal  
elastic arteries in childhood—

Pulmonary arterial lesions observed in autopsy cases of Kawasaki disease having the absolute stage were studied.

This study comprised of sixty-two cases. Some findings developed in three cases of eleven in which death occurred after the 90th disease-day and these findings were compatible with those of the sequelae of Kawasaki arteritis. These lesions consisted of slight fibrous thickening of intima and irregular disruptions of internal elastic fiber, both of which appeared in elastic arteries. In contrast, there were no cases in which muscular arteries were involved.

The pulmonary arterial lesions in this disease were very slight in many cases and they were considered to be prone to heal. Even if sequelae had developed, they may have a rare possibilities of causing pulmonary hypertension.



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 62例の川崎病剖検例の中から陳旧期に相当する11例の肺動脈病変について病理組織学的に検討した。この内3例の弾性型肺動脈に線維性内膜肥厚,内弾性板断裂をみ,川崎病の癒痕として矛盾しない所見と判断した。本症における肺動脈病変は,冠状動脈病変に比べ軽微なものが多く,大半の症例で癒痕を残さず治癒するものと考えられた。また,癒痕を残した症例でも肺動脈圧の上昇は,形態的には認められなかった。